神流川雜藁

参照地圖。陸測五萬（金峰山・十石峠・万場・寄居・高崎）

上州神流川は利根の貢流烏川の支川であつて、其の下流の鬼石町附近には、小藤文次郎博士の研究によつて、倍々その眞價を認められるやうになつた彼の有名な三波川層に屬する三波石（秩父青石）を産するし、叉中流から上流へかけては、地質學者の所謂山中地溝帶を形成してゐることによつて、其の名夙に世に著はれてゐる。

然るに翁鬱たる深林に掩はれてゐるその源流地の幽谿は、附近に之といふ程の峻峯が無い爲めと、交通の不便といふことなどに禍され、近頃まで一般登山者の興味を唆る迄には到らなかつたが、荒船、兩神、甲武信などの方面から觀た水源地附近の低い乍らも蒼古な山姿や、いやに小皺の多い、謂はば紛糾極まりないとでも言ふべき谷筋の姿に心牽かれる爲めにか、一部の登山家の間には幾何か注目されて居つたらしく、日本山岳會の機關雜誌『山岳』第十六年第三號（奥上州號）に拙稿「晩春の神流川上流へ」、續いて同誌第十七年第一號に吉岡八二郎氏の「神流川雜記」が發表されてから間もなく、故大島亮吉氏なども、その熱愛してゐた荒船・神津牧場から歩を進め、此の水源地を繞つてゐる上信國

境の山々に沿うて逍ひ歩かれたやうである。

私が此の地方へ足を蹈入れた抑もの始めは、大正二年四月上旬、父や伯父の一行に追蹤して下仁田から鹽ノ澤峠（磐戸峠）を踰え、白井を經て濱平に到り、殘雪の大神樂（大甘樂）澤を中途まで溯つて引返し、歸路は万場を經て鬼石町附近の渓流に三波石を賞し、新石驛に出た時であるが、其の頃の此の水かみのただずまひは實に静謐な、武陵桃源の境とは恁うした處でもあらうかと想はれるくらゐな幽境であつた。そして其の當時の子供心にも、大神樂澤（大甘樂澤）の小尾根から望んだ淺雪豐な淺間の山容は、今尚ほハツキリと脳裡に刻まれてゐる。

偖て、此の神流川水源地附近は陸測五萬圖（金峰山・十石峠）を見ても判る通り、實に小皺の多いやこしい處であるから、細かな山澤の名を覺え込むのは勿論容易な事では無からうが、せめては其の重立つたものだけでも宜いから知つて置きたいものだと、大正十年の晩春再遊の折には、能ふ限り土民測量（武田理學博士の造語―山澤名其の他に關し里人に就いてよく聞糺すこと）に努めたが、確かめて置きたいと希ふ山澤に就いては里入の稱呼や意見が區々だつたので、大した収獲も無く歸京した。

ところが最近に全く偶然の機縁から水源地の古繪圖(肉筆原本）を發見入手したので、同地に就いては多少の知識を得た故、此の圖に基いて少許り書いて見ることにする。然し此の圖を主とし、陸測五萬圖を從として記述せんとする私の圖上談山は、古繪圖に忠實ならんとするの餘り、其處に多少の矛

盾が生ずるかも知れないが、之は何分諒承あらん事を豫め御願ひして置く。

而して古繪圖に先立ち、手近に在る二、三の古圖書を渉獵して、神流川に關する記事を抜萃して見るのは、強ち無益なわざでもあるまいと信ずる。

先づ神流川の古名を索めると、

感納川（績太平記）　神奈川（武田三代記）　神野川（豆相記及び和漢三才圖會）　鉋川（國史略及び逸史）　神名川（管窺武鑑）　甘奈川（岐岨日記）　カミ長川（回國雜記）　カミノ川（河越記）

など幾通りも有り、現今用ふるところの「神流川」は、關東古戦録に顯れたのが最初のやうに記憶する。

古名の詮索は扨置き、次に安永三年(紀元２４３４年 西暦１７７４年)八月十九日の自序ある林義卿の『上野國志』を見ると、

神流川　濱平村ノ山中ヨリ出武上ノ界ヲ過今里村二至テ屈シテ北流シ緑野郡浄法寺ノ東ヲ經テ那波郡角淵ニ至リテ山川ニ入ル此川石美ナリ。

嘉永六年(紀元2513年 西暦1853年)刊行の富田永世撰『上野名跡志』には、

山中　神流川水源　三波石

南牧ノ南ノ山間東西十里許ヲ山中ト云、神流川（濱平村ノ山中ヨリ出ヅ武蔵志料信濃地名考等ニ信

州佐久郡金峯山ノ東ニ三峰アリ千隈川荒川神流川ノ水源ナリ神流川ハ東北二分ルルト云（信濃ノ地ニ發テ上野ニ出ルカ）後上野志上野名跡考等二神流川ハ甘樂郡濱平村ノ山中ヨリ出武蔵上野ノ堺ヲ過今里村ニ至テ屈シテ北流シ緑野郡二出ツト云此今里村ノアタリ水涯ニサンバ石トテ奇石アル也、後上野志二三波石或ハ三巴石或ハ三番石一番二番三番三ツノ大石アリ數四十八神流川ノ上今里村萱蕪村ノ水旁ニアリト云、神流川モ甘樂郡ヨリ出レハ甘樂川ナルヘシ。

安政支年（紀元2515年西暦1855年）に下總布川の人、赤松宗旦義知が著した『利根川圖志』巻之一を見ると、利根川金圖（三枚表）の『附記』に、

神流川は甘樂郡濱平の山中より出で南甘樂郡十石峠横見峠砥山杖立ヲトケ山大峠西東御荷鉾山等の渓流を并せ北武蔵國秩父郡の境嶺志賀坂峠赤岩峠坂丸峠土坂峠の證水を并せ下て上武二州の境と爲り三波川を并せ漸北流して烏川に合す。

また明治十七年四月十六日内務省地理局出版の『新篇武蔵風土記稿』秩父郡巻七十七には、

神流川　水源ハ郡ノ西信濃上野ノ三國堺ナル山谷ヨリ出テ上野国甘樂郡山中領ト號シ村落凡二十ケ村ノ内ヲ東流スルコト十里許夫ヨリ本領ノ北邊ナル矢納村ト甘樂郡護（譲の誤？高畑）原村ノ間ヲニ里許モ郡界ヲ流ル此邊マテヲ土人ハ稱シテ三波川又ハ神流川ト呼ケル夫ヨリ北流シテ児玉郡上阿久原村ト上州緑野郡鬼石村トノ間ニ注キテ神流川ノ名アリ

とあるが、之を見ると神流川と其の支流の三波川とを混同してゐるやうである。

また明治十九年九月出版の内務省土木局編纂『六十五大川流域誌』第壹區利根川流域烏川（本文第三頁）の部には、

神流川（南甘樂郡猶（楢の誤植なるべし。高畑）原村二發ス○河線二十里）

と出てゐる。頗る簡単ではあるが、流程を示したのは此の書を以て最初（？）とするやうである。

尚ほ野崎左文著明治廿七年七月發行の『日本名勝地誌』第四編東山道之部上、上野國「緑野郡」の部「神流川」の條には、

神流川　源を南甘樂郡の西境に發し東流して本郡及び武蔵の兒玉、賀美二郡の間を過ぎ東北に向て利根川に會す、平日は水涸れて河底を徒歩し得べしと雖も霖雨一たび至れば河水忽ち漲溢して水勢頗る險急を致す、其の上流鬼石町以西は怪岩奇石河中に起伏し就中茶盆石、浦島の釣舟、達磨石、屏風岩、曼荼羅石、雲石、水分石、姥石等は古来最も著名にして其景の幽雅なる郡中に冠たり、石は皆青色にして木理紋あり、小なるものは庭石に用ふるに宜しく好事家の常に愛玩する所とす、唯だ其他（地の誤植なるべし。高畑）の僻遠なるが爲めに来て此の奇景を賞する者太だ牢なり。

とあり、大いに三波石（秩父青石）を推賞してゐる。囚みに明治二十二年出版の『改正上野國全圖』には十石峠の東側を流れてゐる黒川（神流川の一支流）の水源と覺ゆるものに「神流源」と傍註してあるが、

元より正鵠を得たものでは無い。

前記『上野名跡志』に、

神流川モ甘樂郡ヨリ出レハ甘樂川ナルヘシ

とあるが、夫れが果して肯綮に當つて居るや否やの問題は暫く措き、「神流」といふ川名に關しては千曲川・荒川の二川名と併せて頗る面白い傳説があるから茲に記して見よう。

上信武國境の三國山（三國峠）附近に在る高天原は、日頃仲の悪い盤古神と建御名方命とが、之も三國山に程近い梓山の戰場ケ原で戰つた折討死した神様の死體が澤山積まれた處であるが、共の死體の流れた川を神流川と呼び、夥しい血潮が流れて水面が眞赤に彩られた川をチクマ（血隈即ち千曲）川と呼び、また澤山の武器を一紮げにして流した川を荒川と呼ぶやうになつたと傳へられてある。

偖て愈々古繪圖に移るが、之は大判の美濃紙十六枚を繋ぎ合せたものに描かれ、縱四尺餘、横六尺餘、正徳四年に楢原村に於て作製されたものであるから、彼の「黒部の秘密圖」（（登高行（慶應山岳部年報）第三年参照））の如き作製年代不詳の歎きを見ずに濟むのは有難い。即ち此の正徳圖（便宜上斯く呼ぶことにする）は、圖面の右下に流麗な書體で、

繪圖之通山内相違無御座候　以上

正徳四年午五月

山中楢原村　名主　伊　右　衛　門

濱平御鷹見庄兵衛、同甚兵衛、同伊右衛門、同安右衛門

此度御代官様山内御見分被遊候郷上御吟味之上御留メ山境卜百姓山境御定被遊候二付則境判仕候向

後御留山大切相守可申候　以上

正徳四年午九月

楢原村枝郷濱平

御鷹見庄兵衛、同甚兵衛。同孫右衛門、同安右衛門

惣百姓代　三右衛門、同彦兵衛、同助之丞

楢原村　名主　治　郎　右　衛　門

と明記してある。而して此の正徳四年を日本歴史年表に據つて調べて見ると、

正徳四甲午年。人皇第百拾四代中御門天皇御宇、将軍徳川家継（紀元2374年西暦1714年）

を出てゐた。即ち本年（昭和参年）から溯ること二百十四年。藤田家々譜に徴して常時の甘羅（甘樂）郡邑主は、藤田英賀なる人であることが判つた。

そして正徳圖は彼の有名な正保圖（徳川時代には單に古圖といへば正保圖（正保二年乙酉國繪圖）、新繪圖といへば元祿新國繪圖のことを指したものである）よりも六十年近く新らしいものであること

が判り、尚ほ此の正徳圖の最初の持主が楢原村の名主の治郎右衛門なることは、同圖裏面に「上州楢原村濱平、持主黒澤治郎右衛門、四枚之内」と記されてあることに依つて明瞭であるし、特に四枚之内と明記してあるからには、常時同じ圖面を四枚作製して代官、名主、御鷹見、惣百姓代が各一枚宛を保管したものであらうことは想像に難くない。

次に正徳圖に顯れてゐる山名を掲げ、以て臆測混りの圖士談山を檀にしてみる。

船　艫　（高岩ヨリ四百間）
高　岩（蟻ケ峠ヨリ高岩迄九百間）
蟻ケ峠（神流川水元）
三　國　（蟻ケ峠ヨリ三國迄千百四拾間）
棒切峯（三國ヨリ六百間）
魚留峯　（棒切峯ヨリ五百四拾間）
鵬　峯　（魚留峯ヨリ千五百六拾間）
葡萄峯（鵬峯ヨリ四百六拾間）
薇　萱　（葡萄峯ヨリ五百六拾間）
諏　訪　（薇萱ヨリ千百四拾間）

松木尾根　（諏訪ヨリ五百貳拾間）

先づ三國から始めるが、之は金峰山圖幅に在る獨立標高點一八二八・二米の三國山のことであつて、日本武尊御東征の砌踰えられた二木木嶺と言ふのが之に該當すると傳へられてゐる。

信州松本藩士鈴木東武・三井弘篤の兩人が藩命に依つて編纂した『信府総記』（全拾冊。享保九年（紀元2384年 西暦1724年）水野忠恒の序有り）巻之一 第四「佐久郡山川ノ部」を見ると、

三國山　武蔵上野信濃三國ノ界ニテ即チ峰通ヲ境界トス是ヨリ落合村梓山村出口道迄ノ間山中國境知レス

此三國山ハ蟻ケ峠ヨリ辰巳ノ方、

とあり、大橋方長撰『武蔵演路』（寫本全八冊。安永九年（紀元2440年西暦1780年）に成る）には至つて簡単ながら、

三國山　信上武三州ノ界也

とある。また明治十三年十二月再版の長野縣編纂『信濃國地誌略』上巻「佐久郡」の部には、

三國嶺ハ梓山村ニ面起シ、西ハ高原山ニ連り東北ハ武蔵上野ノ國界ニ跨ル、故ニ三國嶺ト稱ス

また『新篇武蔵風土記稿』秩父郡「古大瀧村」の部には、

三國山　御林山ノ内ニテ武州秩父郡信州佐久郡上州甘樂郡三國ノ界ナリ栃本ノ西七里餘ニアリ

同じく「中津川」の部には、

三國山　居村ノ西四里許ニアリ即チ上信武三ヶ國境コノ山ノ頂ニアリ信州佐久郡梓山ヘ通フ路スシ
ナリ

と出てゐる。尚ほ『日本名勝地誌』第四編東山道之部上、上野國「南甘樂郡」の條を見ると、

三國山　郡の西南隅に聳ゆる秀嶺にして武蔵の秩父郡、信濃の南佐久郡に跨り海面より高きこと三千五百尺、其東麓上野村大字楢原より一里三十町にして山頂に達す、南に大蛇坐山、北に嘯山あり東に兩毛の平原を俯観し南に秩父の連山群立するを望み眺望爽快、殊に避暑に適すと雖も地僻にして且山上に休憩すべき屋舎なきが故に登攀者も亦往々其の不便に堪へずして再遊の念を絶つと聞く。

とあり、稍々詳しい記事ではあるが「東に兩毛の平原を俯観し」は聊か誇張の嫌ひ無きにしも非ずである。而してまた『山岳』第十一年第一號（秩父號）に掲載された河田羆編『武蔵通志』（山岳篇）國司嶽の條下には、

三國山。高五千五百尺西は同上(前文を受けて単に同上とあれど同上とは即ち「信濃梓山村に界す」のこと也。高畑。）北は上野南甘楽郡楢原村に界す三州に跨るを以て此名あり字猿市より上る十八丁、以上同村（大瀧村のことなり。高畑。)中津川に屬す。

といふ記事がある。濱平では此の三國山を小三国、奥秩父の甲武信岳（天科・芹澤・廣瀬附近では之を三國と俚稱して居る)を大三國と俚稱する由は、前記『山岳』奥上州號（第四八頁）で述べて置いた。

三國山の西方に蟻ケ峠といふのがある。金峰山圖幅の△一九七八・六米の峯が夫れであることは『山岳』秩父號所載木暮理太郎氏の「奥秩父の山旅日記」第五六頁末行に明記してあるので知るを得たが、『信府統記』の記事だけでは、ちよつと其の位置を判定し兼ねる。即ち同書は、

蟻ケ峠　これい峠ヨリ辰巳ノ方上野國ニテモ同名

といふてゐる。蟻ヶ峠の西北方獨立標高點一九七〇米の峯らしいものに、正徳圖は高岩と冠してゐる。元より陸測五萬圖と正徳圖とは符合せぬ個所が多い上に、里人の言とても頗る曖昧であるから慥に夫れとは斷定し兼ねるが、大正九年に私を諏訪山へ案内してくれた濱平の高橋福松が『高岩は橡平の窪の奥にあるで』と言つてゐたことから推測したものである。船艫は正徳圖に「高岩ヨリ四百間」とあるから、高岩の北方の一八二〇米の標高を有する峯（十石峠圖幅の△一六三九・四米の峯の西南方に在るもの）であらう。

前記三國の北方一六四〇米の圈を有するのは棒切峯、其の東北方一五二〇米の圈を有するのが魚留峯に該當する。鵬峯は十石峠圖幅に秩父大瀧村とある其の秩の字の北方一六八〇米の峯（万場圖幅に跨る）であらうと思ふ。

而して万場圖幅の△一六五八・一米を中心とする二、三の尾根を、葡萄尾根と總稱し、共の中の一峯を葡萄澤ノ頭と稱へるやうに聞いてゐるが、夫れが一六五八・一米の峯に該當するか何うかは不明で

ある。

以上八つは上信又は上武の國境をなすが、以下の三つ即ち薇萱、諏訪、松木尾根は全く上州に屬している。此の三つのうち諏訪山の位置は陸測五萬の十石峠圖幅に明記してあるし、其の紀行は『山岳』の奥上州號に掲げて置いたから就いて見られたい。正徳圖の薇萱なる稱呼は、どの尾根に附けられたものか、里人の間にも異説が多くて推測に苦しむ次第であるが、正徳圖を基として之を十石峠圖幅に索めると、何うやら諏訪山から東南へ派出された尾根に附けられたものらしく思はれる。松木尾根は陸測五萬圖の、諏訪山三等三角點から西南へ走る尾根の總稱で、尾根の末端が神流川本谷に臨む邊りに死小屋といふ餘り芳しからぬ小字名が附いてゐる。

因みに『山岳』奥上州號で私の述べて置いた御巣鷹山（正徳圖には鷹巣山となつてゐるが里人の多くは御巣鷹山と敬稱してゐる）とは、諏訪山北方の岩尾根の或る特定の場所を稱するのであつて、特立の一峯では無く、正徳圖には「鷹巣山　立三百間、上横三百間、下横四百間、立二百拾間」と傍註が施してある。また鷹巣山、巣鷹山）の如何なるものであるかは、『新扁武蔵風土記稿』秩父郡、卷十九）の部に、

巣鷹山　山ノ名ニアラスソノ昔巣鷹ヲトリ献上セシ山ヲ云今モ年々ニカナタコナタニ巣ヲカクレハ土人見出シ次第ニトリテ献上セシコトトナリヌ

とあるので其の概略（あらまし）が判らう。

大神樂澤（大甘樂澤）は此の尾根から發源してゐる。之を曾て『山岳』奥上州號で股引澤（股引澤とは私の聞違ひであつて之は正徳圖を一覧するに及んで物引澤の正しい事を知つたゆゑ本書に再録するに方り訂正して置いた）の水源の様に記したのは、全く私の大きな錯誤であつた。

偖て試みに天保版の『富士見十三州輿地之全圖』を取出して檢すると、三國山から十石峠の間に礒峠尾倉岳コレイ峠などいふのがあるが、尾倉岳を除いては信府総記にも其の名が出てゐる。尤も十三州圖の礒峠とは何かの誤で、蟻ヶ峠の正しい事は同圖よりも遙に古い正徳圖を見れば直ちに了解出来る。

尾倉岳といふのは十石峠圖幅の小倉山に他ならず、同山に關しては大島亮吉氏が詳細なる記文「小倉山」を、『山岳』第二十年第一號（秩父號第二）に掲げて居られるから夫れを参照されたい。また序乍らコレイ峠といふのは、『信府統記』に「これい峠。峰通國境十石峠ヨリ辰巳ノ方上野國ニテモ同名」と出てゐるものであつて、秩父の古禮山の様にサハギバウシ（コレツパ又は山ガンピョウとも言ふ由）の方言「コレ」から導かれたとかいふ稱呼であるや否やは調べ漏らした。十石峠圖幅で言ふと、群馬縣多野郡上野村字中ノ澤から、長野縣南佐久郡南相木村三川に到る小径が、上信國境の凹所（獨立標高點一七〇五米）を踰えてゐる其の凹所に附けられた峠名であるが、現今では殆ど荒果ててゐる由を、

大島氏は「小倉山」で「現今通行者絶え路痕なき程なり云々」と述べて居られる。私も夫れと同じ意味の話を濱平の旅舍で耳にした。

次に水流其の他に關し正徳圖を主とし、之に里人の話や私の貧しい經驗知識を織交ぜて少許り述べて見よう。

夫れには順序として先づ濱平に言及するが、同所は十石峠圖幅を見ても判る通り、楢原村最奥の部落であつて、正徳圖を見ると人家が七軒（神流川左岸に五軒右岸の大神樂澤が本流と落合ふ附近に二軒）描いてある。同所の神流川右岸に、現今では鑛泉宿（經営者、高橋藤十郎）が一軒在るが此の鑛泉宿のことは既に『山岳』奥上州號に略記して置いた。共の後明治廿五年七月十一日出版の高橋周楨著『上野鑛泉誌』を見ると「濱平鑛泉冷」として左の記事があつた。

①　泉質　鹽類泉（分析温度未詳）

鹽素　最多量。那篤榴母　多量。加榴母　少量。加榴叟母　稍多量。麻倡涅旻母　稍多量。硫化水素　少量。游離及和合炭酸　少量。

固形物総量　七・七七

②　効能

胃弱。慢性胃腸加答爾。血液不良（下略）

③　沿革

開基未詳、十九年八月栖原村高橋彦平鑛泉規則ニヨリ許可ヲ得テ營業ス

④　位置氣候

南甘樂郡ノ西南栖原村字濱平ニアリ郡山四圍ヲ環擁シ神流川ノ水源三國山ノ東麓ニ位シ山水奇絶風光明媚殊ニ空気清涼幽邃ノ地ナリ

⑤　近傍勝區

三國山西境ニ聳ユル高山ニシテ信濃武蔵兩國ニ跨ルヲ以テ此名アリ南ニ大蛇坐山北ニ嘯山アリ共ニ眺望佳ナリ

此の濱平から神流川水源迄の間に於て、正徳圖に委しく流程の示してある澤は左の七流である。

神流水元（ふたの澤落合ヨリ九百八拾間）

ふたの澤（水元ヨリ落合迄三百四拾間）

捧切澤落合ヨリ七百貳拾間

棒　切　澤（水元ヨリ落合迄六百四拾間）

魚留澤落合ヨリ六百四拾間

魚　留　澤（水元ヨリ落合迄千九百四拾間）

鵬澤落合ヨリ三百六拾間

鵬　澤（水元ヨリ落合迄二千六百間）

大蛇倉澤落合ヨリ四百四拾間

大蛇倉澤（水元ヨリ落合迄千九百六拾間）

葡萄澤落合ヨリ六百六拾間

葡　萄　澤（水元ヨリ落合迄二千四百間）

死小屋ヨリ是迄六百八拾間

此の他にも流程不明の澤の名が五つ六つ擧げてある故、夫等をいちいち拾ひ乍ら行くと、先づ鑛泉宿の傍に落ちてゐるのが井野澤（十石峠圖幅參照。鑛泉符號と濱平の平字との間を過ぎて本流に注ぐもの）。鑛泉が湧出るといふ積りか現今では湯ノ澤と俚稱してゐるが、元より正鵠を得たものではない。その直ぐ南方の虎王神社（地圖に神社記號あり）の傍で本流に注いでゐるのが大神樂（大甘樂）澤。虎王神社から仰見えるトヤノツムヂ（△九七六・二米）の西南方の家倉（地圖に岩記號ある獨立標高點一二五八米の峯？）から發してゐるのが江戸澤（現今、井戸澤或ひは井ノ澤に作る上州訛イ（ヰ）とエの混用に基くものならむ）といひ、前記の松木尾根から岐れて虎王神社の背後まで山脚を伸ばして來てゐるのが大多尾根である。江戸澤の落日を右に見乍ら稍〃遡ると、小徑は本流と少しく離れ、夫れと同時

に右岸に在る大きな岩の横手を行くやうになる。地圖にも岩の符號があるが正徳圖に明記してある長岩といふのが之であつて、附近は春は燃ゆるばかりに輝かしい新緑、秋は絢爛目をうばふばかりの紅黄葉が一入美はしい處である。長岩の近くの樹深い左の崕上から瀧の様な小澤が落ちてゐる、地圖はともあれ正徳圖には水線記號はあるが無名である。長岩から少し行くと、小徑は地圖では本流を渡つて左岸沿ひに走つてゐるが私は之は知らない。現在は前記の江戸澤落口の少し上流で右岸に移つてから暫くの間は其の儘の右岸沿ひである。而して地圖の本谷の本字の北側の、本流が少し曲つてゐる其の曲角（右岸の）へ松木尾根の岩崕（地圖の一三〇〇米附近に岩の符號あり）から急?してゐるのが手水澤。手水澤と本字との間で手水澤の南拾數間の處に流れてゐる小澤が物引澤であつて、大正十年の晩春、私は此の澤から諏訪山へ登つた。本字の南方で本流と落合つてゐるのは火打石谷である。而して正徳圖の火打石なる峯を地圖上に索めると、何うやら△一四四四米に該當するらしいが、高橋福松は其の山名も位置も知らぬやうだつた。江戸澤と火打石谷迄の間を總稱して板小屋澤と俚稱する。地圖の本谷の谷字の附近（右岸）を大渡と稱し、左岸には可なり立派な澤が注いでゐるが、地圖にも正徳圖に其の名を示してない。イリの窪の下流に當るからイリの澤とでも稱したいが、江戸澤の近くに入澤といふ至つて短い有るか無いかの小澤が存在する以上、此の名はちと附けにくい。

本流は此の邊で大きく曲る。そして松木尾根の西側に沿うて本流に注いでゐるのがオノクボ澤（正

徳圖に「おの久保澤」とある）、オノクボ澤と松木尾根末端の死小屋の岩符號との間の對岸（左岸）で本流と落合つてゐるのを犬遣谷と稱する。続いて同じく左岸に挾（狭？）岩といふ小字があるが位置は不明。

丁字小屋といふ小字は、諏訪山の西微南の標高線の數字一三〇〇と記した邊りから下流へかけての稱であつて、同名の澤は此の標高線數字附近から發して本流へ注ぐところの、傾斜の急な、極く短い小澤である。雨後の二、三時間は申譯に水も流れやうといふ程度のものであるが、其の對岸（左岸）に押出して來てゐるのは、上信國境の船艫から分派された△一六三九・四米の岩尾根を盟主とする深林に恵まれた尾根であつて、俚稱クヒノクラといふ。

『山岳』奥上州號木暮理太郎氏の「利根川水源地の山」に、「オヒは顯れるクヒは隠れることで、即ち隠顯する意味であるから……」（一二三頁三-四行目）とある故、此のクヒノクラといふのは、或ひは隠れ岩の在る尾根とでもいふ意味の方言ではなからうか。またクヒはクエの轉訛であつて即ち「崩れ」といふことを意味する故、岩石磊々たる岩の痩尾根だからといふ譯で、クヒノクラと俚稱するのかも知れない。

囚みにクラは上州殊に山地の方言で岩又は岩壁を意味し、漢字を充てる場合には「嵓」を以てするのが正しいさうである。正徳圖を見ると、クヒノクラの先端が神流川本流に臨む邊りに、栃久保といふ小字を示してある。また栃久保の西微南に方るささやかな平(地圖でいふと一四八〇米乃至一五〇〇

米附近）は菅平と呼ばれてゐる。

丁字小屋から少し遡ると左側（右岸の）に葡萄澤が現れる。先年、陸地測量部の一行が測量の爲神流川を遡行した時、濱平を出發してから最初に野営したのが此の澤の葡萄平といふ地點であつた由を當時選ばれて一行の驥尾に附したといふ高橋福松から聞いたことがある。葡萄澤の右岸の小棚といふ小字は、地圖の諏訪山の南方に位する岩符號の下の標高線數字一五〇〇とある邊りをいふ。

大白谷は鵬峯の西方、地圖の獨立標高點一三七六米の尾根から本流迄の間を言ひ、名のやうな大きなものでは無いが、對岸（左岸）の標高線數字一〇〇〇とあるあたりで本流に注いでゐる大蛇倉澤は却々立派な澤である。地圖には何故か岩記號を省略してあるが、此の澤の發源地には大蛇倉といふ美事な岩壁が峙り立ち、高岩も之も諏訪山方面から望むことが出來る。正徳圖には赤味を帯びた御納戸色で塗上げた見るからに物凄（？）い岩が描いてある。

尚ほ此の「大蛇」と「倉」との關係に就いて、昭和参年六月十日、我が『霧の旅會』創立十周年記念大會の席上、木原理太郎氏が『山名に就いて』といふ講演をされた折、兩神山に關し、豫て蘊蓄を傾けらるる考古學上或ひは民族學上から、太古日本の移住民族モン・クメールに依つて遺された言語・信仰に囚る遺跡等に基いて、極めて正確な考證を與へられた序でに、非常に有益な且又趣味の多い解釋を施された。其の後此の講演は『霧の旅』第十年第二十八號（十年記念特輯號）に掲載されたから左に「大蛇」と

「倉」とに關係ある部分を抜萃して見よう。

『唯クラに就て一言すると、これには坐する又は横たはる意から出たクラ（座及鞍）、虎の義から轉じて野獸の總名となつたらしいクラ（狩獵をカリクラといふはこの意味である）及び岩の古い方言であるクラなどがあるが、其中で地名となつたものは最後のクラ位のものであらう。このクラは馬來語のkula（岩）と同じものか、それとも元は韓語らしい岩礁を指すクリから導かれたものか私には判断し兼ねるが、クリはクレ（塊）と同語で、栗の實をクリといふのもカタマリである爲であらう。私が特に面白く感じたのは、有名な大臺ケ原山の大蛇倉で、これは勿論壯大な岩壁に名付けられたものであるが私は大蛇でも住みさうな、又は物凄いといふやうな、つまり形の上から大蛇倉なる名を得たものと考へてゐたが、實はさうばかりではなく、クラと大蛇と同意語なることが忘られるやうになつて、大蛇クラなる合成語が生じ、夫れが岩壁のクラに通ずる所から、具儘岩壁に適用されたものと見るのが至當であるらしく思はれる。上州の藤原から越後の土樽や信州の秋山にかけて、瀑のことをセンと云ふが、それが或る地方ではタキと結び付けられてセンノタキと云フ合成語が誰名となつてゐるなどは、大蛇クラと似寄つた例といへやう。高畑棟材氏の所藏に係る上州神流川上流の正徳圖にも大蛇倉澤といふのが記載されてゐる。探せば尚ほ他にも存するであらうが今の所私

はこの二者以外に知る所がない。』（下略）

此の大蛇倉澤が本流と落合ふ附近には、水岩穴といふ小字がある。

前記の大白谷から更に本流を潮ると間もなく左に鳴澤が顯れる。鳴峯の南側に發源し、西流して本流に注ぐのが夫れである。元は實に幽邃な澤であつたが、今は昔日の俤を偲ぶ術もないであらう。此の澤の合流點と略相対する左岸に、どつしりと押迫つて來てゐる尾根は、高岩から分派された俚稱「栃平ノ窪」であるが正徳圖には此の名は見えない。尚ほ進むと神流川は竟に二つに岐れ、左は支流の魚留澤、殆ど直角に右へ折れるのが本流である。本流を少し遡ると左から棒切澤が合流する、三國山（三國峠）へは此の澤を登るのが順路でもあるし樂でもある。

本流は軈てまた二つに岐れる。金峰山圖幅を見ると、同圖「多野上野村」の「多」「野」の間を過り、更に「上野村」の野字を差挾んで左右に岐れるが、左は支流の「ふたの澤」で之は三國峠に發源し、右即ち蟻ケ峠の東側に位する御幣平に發するのが、神流川の源泉である。正徳圖を見ると、御幣平「神流川水元の傍に「水元ヨリ蟻ケ峠迄七百貳拾間」と記してある。

御幣平といふのは、蟻ケ峠から東方に位する國境上凡一八二〇米の處から北へ向つて派出された尾根（金峰山圖幅参照。「多野」野の字「上野村」の村字の左側を走つてゐるもの）の或る地點の稱である。

因みに正徳圖の御留メ山といふのは、東は葡萄峯、薇萱、諏訪山を経て松木尾根に至り同所から更に死小屋（正徳圖には松木尾根ヨリ死小屋迄八百三十四間と示してある）を限り、西は船艫から始めて犬遣谷（船艫ヨリ犬遣谷迄二千九百四間）に終る尾根を限りとし、其の以南即ち上信及び上武の國境に到る間の山谷を總稱したものである。

以上で、正徳の古繪圖に基いた上州神流川水源地に於ける山谷の概況は、一先づ述べ終つたが、みづから實査せぬ箇所も多いこと故、思違ひや臆斷も少なくないであらうと思ふ。同好の士の御叱正を得れば幸である。（完）

（昭和三年八月稿）

附記　正徳圖は『鴫』をミミヅクと訓ませてゐるが、漢和大辭典、字源、言泉、大日本國語辭典及び日本鳥類圖説等を渉獵しても、ミミヅクに該當すべき如上の漢字は見當らなかった。之に酷似する鵬は音ホウで支那の『荘子』逍遙游の篇に語原がある。そして之は我國の歌舞伎十八番『暫』の臺詞にも引用されて居る通り頗る有名な鳥であるが、要するに全く想像によつて作られた大鳥ゆゑ勿論實在して居る筈がない。

恐らくうそ字かあて字か造字か、或ひはまた何かの略字か、それも結局詮索不明に終って了った。

尚ほ本稿と密接な對照関係を有する『山岳』奥上州號所収『晩春の神流川上流へ』は、之を訂補したうへ本書に再録してあることを、念の爲め申添へて置く。

『山を行く』終

NoobowSystems Lab. Tomioka, Japan 2021
Version 1.0.00 2021-07-21